群教セ	G09 - 02
	平17.228集

意欲的に英語で表現しようとする態度を育てる指導の工夫

── 自己課題を明確にした振り返りを通して ──

特別研修員　　山本　裕美　（館林市立第一中学校）

《研究の概要》

本研究は、自己課題を明確にした振り返りを通して、意欲的に自分の思いを英語で表現しようとする態度を育てることを目指したものである。自分の思いを表現するために、書くことと話すことの学習において自己課題を設定する。その課題解決に向けて、どれだけ自己課題を解決していくことができたかを課題・評価カードで振り返る活動を行うことにより、達成感を味わい、意欲的に英語で表現しようとする態度を養おうとした。

キーワード　〔英語一中　自己課題　振り返り　課題･評価カード〕

Ⅰ　主題設定の理由

国際化が進む社会の中で、外国語によるコミュニケーションの必要性がますます高まってきている。多くの企業が外国に支社を作り、外国の企業と業務提携する状況の中で、インターネットやＥメールにより、様々な国々の間で情報を瞬時に送信し合うことが日常的になっている。海外転勤のみならず、日本で勤務していても上司や同僚が外国人というケースも決して珍しいことではない。外国語によるコミュニケーション能力は、特定の人だけでなく、世界のどこに住み、どんな職業に就いていても必要とされるようになるであろうと考える。したがって、外国語を通して情報を正確に理解することはもちろん、意欲的に自分の考えを表現し、相手に正しく伝わるよう工夫することが必要になってきている。また、学習指導要領にもコミュニケーション能力の育成を目標に掲げ、「自分の考えや気持ちなどが聞き手に正しく伝わるように話すこと」を配慮事項としており、こうした能力は今後より一層必要になるであろうと考える。

生徒の実態をみると、人間関係が希薄になり、限られた範囲の仲間とだけかかわりをもとうとする生徒が多い。日本語でさえも、自信をもって発表することを苦手とする生徒が少なくない。「将来英語が必要になるから」「外国人とコミュニケーションをとりたいから」という理由で、意欲的に英語での表現活動に取り組む生徒もいるものの、「受験以外に英語は必要ない」と考え、消極的な態度を示す生徒もいるのが現状である。しかし、ほとんど全員が自分の思いを英語でもっと表現できるようになりたいという前向きな気持ちをもっており、少しずつ英語を通して自分の思いや情報を伝え合う喜びを味わうようになってきているように思われる。

これまでの授業では、表現活動としてスキットによる場面別の会話活動やインタビュー活動、スピーチ活動などを実施してきた。特にインタビュー活動では、回を追うごとに話しかける友達の数も増えてきている。その一方で、自分の考えを皆の前で発表するスピーチ活動では、スムーズにできるようになってきているが、堂々とした自信あふれる段階までには達していない。

その主な理由として、自分の思いを意欲的に伝える方法、つまり、どういう時に強く言ったりゆっくり言ったりし、また、どのようにジェスチャーを使ったりするのかが分からないのではないかと考える。そこで、今までよりもっと魅力的なスピーチができるように、それぞれの生徒に合った効果的な表現の仕方を身に付ける指導の工夫が必要であると感じる。そのため、ふだんの授業の中で、生徒が自分に必要な表現方法に気付き、それに自己課題として向き合い、解決していく場を設けて、個に応じた支援をしていくことが大切であると考える。

以上のことから、スピーチ活動の中で、生徒がもつ課題をより明確にし、その課題に応じた個々

の練習を行い、振り返りによって課題にどれだけ迫れているかを確認することは、仲間同士で互いに認め励まし合いながら、達成感を味わい、意欲的に英語で表現しようとする態度の育成に有効であると考え、本主題を設定した。

II　研究のねらい

英語を話す活動に、自己課題を明確にした振り返りを取り入れれば、意欲的に自分の伝えたいことを英語で表現しようとする態度が育つことを明らかにする。

III　研究の見通し

1　つかむ過程において、スピーチのモデルから効果的にスピーチを行う表現の工夫を学び、意識して音読練習を行っているかを振り返れば、自分が解決すべき課題に気付くであろう。

2　追究の過程において、スピーチ原稿を作成する活動の中で、設定した自己課題の表現力が身に付いているかを振り返れば、互いに学び合いながら課題を追究できるであろう。

3　まとめの過程において、自己課題を提示しながらスピーチ発表を行い、自分や相手の表現力が向上しているかを振り返れば、達成感を味わい、意欲的に英語で表現しようとする態度が身に付くであろう。

IV　研究の内容と方法

1　研究の内容

(1)　意欲的に英語で表現しようとする態度について

「意欲的に英語で表現しようとする態度」とは、生徒が身の回りのことについて自分の考えや思いを、学習した言語材料を使って生き生きと自信をもって伝えようとする態度であるととらえる。英語で表現する手段として「書くこと」と「話すこと」があるが、「書くこと」においては、英語の文章構成の特性を生かして、自分の思いや相手の知りたいことを順番を考えながら整理し、相手に分かりやすく文章をまとめようとする態度の伸長を図る。「話すこと」においては、自分の思いを効果的に伝えるために、相手の関心を引く魅力的な表現力を身に付けていこうとする態度を育てていく。

それぞれの過程における目指す生徒像は次のとおりである。

①　スピーチのモデルから効果的にスピーチを行う表現の工夫を学び、それらの工夫を意識して音読練習を行っているかを振り返ることで、自分が解決すべき課題に気付くことができる生徒。

②　自分の思いを表現できるようにスピーチ原稿を作成する活動をグループで行い、自己課題にどれだけ迫れているかを振り返ることで、互いに学び合いながら課題を追究しようとする生徒。

③　自分の思いを効果的に表現できるように音声練習を行い、自己課題の解決を意識したスピーチ発表ができたかを振り返ることで、達成感を味わい、さらに英語で表現できるようになりたいと感じる生徒。

(2)　スピーチ活動に振り返りを取り入れることについて

スピーチ活動に振り返りを取り入れたのは、自分の思いを相手に分かりやすく伝えるために、自分に必要な表現方法は何かを考え、選んだ課題がどれだけ身に付いているかを確認するためである。自分の思いを英語で表現するには、自分の言いたいことだけを伝えるのではなく、Q＆A形式の会話を通して相手の知りたいことを盛り込み、内容を豊かにすることが大切である。また、自分の思いを相手に分かりやすく伝えるためには、生き生きと自信をもって話すことも大切である。具体的には、「大きな声を出す」「原稿を見ずに前を見る」といった一般的な話し方はもちろん、「強弱をつける」「英語らしく発音する」「ジェスチャーを使う」といった英語特有の表現技法を身に付けることが必要である。

また、学習の過程で、自己課題は増加したり、より具体化したりして、変化していく。そのため、課題・評価カードに自己課題を学習過程ごとに記録していく。課題・評価カードは、必要な表現方法が観点別にリスト形式になっており、それぞれの課題が達成できているかを評価できるようにしたものである。

各過程の内容と課題・評価カードを活用した振り返り活動の方法は次のとおりである。

つかむ過程では、スピーチのモデルから、自分の思いを相手に伝えるために効果的なスピーチの表現の工夫を学び、それらの工夫を意識して音読練習を行う。音読練習後に表現力が身に付いたかを課題・評価カードで振り返り、自分が解決すべき課題に気付いていく。

追究の過程では、自分の思いをそれぞれの課題ごとに解決の手だてなどが記されているアドバイスブックを活用しながら英語で表現し、それをグループでＱ＆Ａ形式の会話を通して相手の聞きたいことを盛り込み、内容を膨らませていく。そして、ある程度まとまった英文をスピーチの形式に整理し、まとめていく。このスピーチ原稿を作成する活動は、課題の追究がどこまで進んでいるかを課題・評価カードで振り返り、評価しながら進めていく。追究の過程でも新たな課題に気付いた場合は、その都度記録をし、練習・振り返りを繰り返していく。

まとめの過程では、今までの課題を提示しながらスピーチ発表を行う。スピーチ後は、自己評価や相互評価によって自己課題にどれだけ迫れたかを課題・評価カードで振り返る。自分が工夫した点や特に意欲的に取り組んだ自己課題を提示し、完成した英文を発表することにより、達成感を味わい、互いに学び合いながら意欲的に英語で表現しようとすることを目指す。さらに、優れたスピーチに触れ、相手のよい点を認め、それを参考にすることで、新たな目標や課題に気付き、今後の学習につなげていくことを期待する。

2　研究の方法

研究の見通しに基づき、次のような方法で授業実践を行い、検証する。

(1)　授業実践計画

時期	平成17年10月下旬～11月中旬	教　科	外国語（英語）
対象	館林市立第一中学校　３年１組　男子17名　女子17名　計34名		
題材名	“Ｉ Have a Dream”	時　間	９時間

(2)　抽出生徒

Ａ女	英語に関して理解力に優れ、ふだんの読みではスムーズにできるものの強弱がなく平坦な英語の読みとなっている。もっと英語らしく読めるようになりたいという希望をもっているので、アドバイスブックを参考にしながら強弱をつけることで、リズミカルに表現できるよう支援し、人前で堂々と発表することに自信がもてるようにしたい。
Ｂ男	英語で表現力豊かに話せるようになりたいと思っているが、英文の組立や発音に苦手意識をもっているため、自信がなく小さな声で発表することが多い。原稿を作る際には、アドバイスブックの例文を参考にしながら「主語＋動詞」の英文構造を意識させ、さらに発表時には、学び合いによって英語で表現できる喜びを味わえるようにしたい。

(3)　検証計画

	検　証　の　内　容	検証の方法
見通し1	つかむ過程において、ワークシート①を活用しながら、スピーチのモデルから効果的にスピーチを行う表現の工夫を学び、意識して音読練習を行っているかを振り返ることは、自分が解決すべき課題に気付くことに有効であったか。	観察 ワークシート① 課題・評価カード①
見通し2	追究の過程において、Ｑ＆Ａ形式の会話やアドバイスブックを活用しながら、スピーチ原稿をワークシート②、③に作成する活動の中で、設定した自己課題の表現力が身に付いているかを振り返ることは、互いに学び合いながら課題を追究できるようにすることに有効であったか。	観察 ワークシート②、③ 課題・評価カード②
見通し3	まとめの過程において、自己課題を提示しながらスピーチ発表を行い、自分や相手の表現力が向上しているかを振り返ることは、達成感を味わい、意欲的に英語で表現しようとする態度の育成に有効であったか。	観察 課題・評価カード③

Ⅴ　研究の展開

1　題材の考察及び目標

題材の考察	本題材では、キング牧師の黒人差別問題と戦う姿と人々の関心を引き寄せたスピーチを参考にしながら、「自分の好きな人・尊敬する人を紹介しよう」をテーマに、自分の思いを英語で表現するスピーチ活動を行う。つかむ過程では、キング牧師のスピーチから自分の思いを伝えるための効果的な表現の工夫とは何かに気付かせ、それらを意識した音読練習を行う。追究の過程では、仲間とのＱ＆Ａ形式の会話を通して、伝えたい内容を膨らませ、振り返りによって自分の思いや相手の聞きたいことがあるか、それらの内容がスピーチの形式にまとめてあるか、などを確認する活動を行う。まとめの過程では、自己課題を提示してスピーチ発表を行う。聞き手は、発表者のよさや課題への努力を審査する活動を行う。発表者は、自分の発表とその審査を基に、自己課題をどれだけ追究できたかを振り返る。このような振り返りを通して、自分の設定した課題を一つ一つ解決していくことを確認することによって、自分の思いを意欲的に表現しようとする生徒を育成することができると考える。
目標	「自分の好きな人・尊敬する人を紹介しよう」というテーマでスピーチ活動を行い、自己課題がどれだけ追究できているか振り返ることによって、課題を解決する成就感や達成感を味わい、英語で表現する楽しさに気付くことで、自分の思いを意欲的に英語で表現しようとする。

2　評価規準

	ア　コミュニケーションへの関心・意欲・態度	イ　表現の能力	ウ　理解の能力	エ　言語や文化についての知識・理解
聞くこと	（言語活動への取組） ①相手のよさや工夫を認めようとしながら聞こうとしている。 （コミュニケーションの持続） ②分からないところがあっても理解しようと聞き続けている。		（正確な聞き取り） ①ＣＤや教師の英語を聞いて本文の内容を理解することができる。 （適切な聞き取り） ②相手のスピーチや質問を聞いて、内容を理解することができる。	（言語についての知識） ①モデル文を聞いてスピーチの仕方を知ることができる。 （文化についての理解） ②人種差別の歴史やキング牧師の心情を理解することができる。
話すこと	（言語活動への取組） ③自分の思いを英語にし、スピーチとして相手に伝えようとしている。 （コミュニケーションの持続） ④相手のスピーチに対して分からないところやもっと知りたいことを質問しようとしている。	（正確な発音） ①発音、強勢、イントネーションなどに気を付けて自分の思いを伝えることができる。 （適切な発話） ②相手に正しく質問したり、質問に答えたりすることができる。		（言語についての知識） ③関係代名詞や現在分詞・過去分詞の後置修飾を用いて身の回りのことを相手に伝えることができる。 ④どの語のどの部分を強く発音し、どこでジェスチャーを使うのかを知ることができる。
読むこと	（言語活動への取組） ⑤表現を工夫しながらモデル文や原稿の音読練習に取り組もうとしている。 （コミュニケーションの持続） ⑥理解できないところがあっても、推測するなどして読み続ける。	（正確な発音） ③正しい強勢や区切りなどを考えながら、音読練習をすることができる。 （適切な音読） ④適切な音量で音読することができる。	（正確な読み取り） ③教師の英語や本文の内容を正確に理解することができる。 （適切な読み取り） ④英文の大切な部分を読み取り強勢や区切りの場所を考えることができる。	（言語についての知識） ⑤モデル文を正しく発音する知識を身に付けている。 （文化についての理解） ⑥人種差別の歴史について理解することができる。
書くこと	（言語活動への取組） ⑦自分の思いを意欲的にスピーチ原稿に書こうとしている。 （コミュニケーションの持続） ⑧よりよいスピーチになるようにペアで話し合い、英文を検討し合っている。	（正確な筆記） ⑤モデル文を参考に、自分の思いを文法にしたがって書くことができる。 （適切な筆記） ⑥段落の構成などスピーチにふさわしい表現やまとめ方で原稿を書くことができる。		（言語についての知識） ⑦関係代名詞や現在分詞・過去分詞の後置修飾を用いて正しく英文を書くことができる。 （文化についての理解） ⑧人種差別と戦った人々に対する感想を書くことができる。

3　指導計画

過程	時間	ねらい（○）と学習活動【見通し】	支援及び指導上の留意点	評価項目【評価規準との関連】 B:おおむね満足、A:十分満足（評価方法）
つかむ過程	1	○関係代名詞（主格）whoとwhichの使い分けができる。 ・whoとwhichを使い分け、空所補充の問題を解く。	・人気のある人や身の回りの人を使うことで、生徒が興味をもって活動に取り組めるようにする。	・関係代名詞whoを用いて英文を作ることができる。 B:whoとwhichの使い分けができる。 A:空所を補充し、英文を完成することができる。 【エ⑤⑦】
		○セクション１の本文を読み、キング牧師のスピーチの特徴や人種差別について知ろうとすることができる。 ・人種差別を知り、スピーチの特徴に気付くことができたかを振り返る。 【見通し１】	・キング牧師のスピーチを聞いたりビデオを見たりすることで、スピーチに必要な相手に訴えようとする力強さや情熱に気付き、それらをワークシート①にまとめるようにする。	・キング牧師のスピーチを聞きスピーチの特徴を知ることができる。 B:スピーチの特徴を３つ以上挙げ、自分のスピーチを振り返ることができる。 A:スピーチの特徴を５つ以上挙げ、項目ごとに自分のスピーチを振り返ることができる。 （ワークシート①）【イ④、ウ①、エ①】
	2	○関係代名詞whoやwhichを使って、自分の身の回りのことを英語で相手に伝えることができる。 ・身近な人物やキャラクターなどを紹介するオリジナル文を作る。	・前時の問題文を参考にすることでwhoとwhichの使い分けをしながら自分の考えた事柄を英文にできるようにする。	・関係代名詞whoやwhichを用いて英文を作ることができる。 B:２～３文作り、相手に伝えることができる。 A:４文以上を表現を工夫しながら作り、相手に伝えることができる。 【エ③⑦】
		○セクション２の本文を読み、人種差別の事実を理解することができる。 ・人種差別問題の事実を理解し、強弱をつけることを意識して音読練習できたかを振り返る。 【見通し１】	・ワークシート①に強弱を表す記号を書き入れることで、重要な情報や伝えたい思いの強い語を強く発音することを理解できるようにする。	・本文の内容から、強く発音する語を考えて音読することができる。 B:ＣＤから強弱記号を書き、音読することができる。 A:本文の内容から強弱を予想し、音読することができる。 （観察、ワークシート①）【イ③、ウ④、エ⑥】
	3	○現在分詞の後置修飾を学習し、活用することができる。 ・絵を見て、現在分詞の後置修飾を使って表現する。	・絵を使うことで、興味をもって現在分詞の後置修飾の文を作ることができるようにする。	・現在分詞の後置修飾を用いて英文を作ることができる。 B:１～２文以上作ることができる。 A:３文以上作ることができる。 【イ⑤、エ⑦】
		○セクション３の本文を読み、ローザの勇気ある行動を理解することができる。 ・ローザの勇気ある行動を理解し、意味のまとまりを考えて音読練習ができたかを振り返る。 【見通し１】	・ワークシート①に意味のまとまりを考えて記号を書き入れることで読むときの区切り方を理解できるようにする。	・本文の内容から、意味のまとまりを考えて音読することができる。 B:ＣＤから区切りを書き、音読をすることができる。 A:本文の内容から区切りを予想し、音読することができる。 （観察、ワークシート①）【イ③、ウ④、エ④】
	4	○過去分詞の後置修飾を学習し、活用することができる。 ・現在分詞の後置修飾を使って、外国製の物や身近な物を表現する。	・実物や写真を使うことで、興味をもって過去分詞の後置修飾の文を作ることができるようにする。	・過去分詞の後置修飾を用いて英文を相手に伝えることができる。 B:１～２文で相手に表現できる。 A:３文以上を表現を工夫しながら相手に伝えることができる。 【エ③⑦】

	【見通し1】	○セクション４の本文を読み、キング牧師らの尊敬できるところを英語で表現することができる。 ・英文を作成できたかを振り返る。 【見通し1】	・本文の中からキーワードとなる表現を見つけることで、ワークシート①にキング牧師らの尊敬できるところを英語で表現できるようにする。	・本文の中からキーワードを探し、キング牧師らについての英文を書くことができる。 B:１～２文以上書くことができる。 A:３文以上書くことができる。 （ワークシート①、課題・評価カード①） 【ウ③、エ②⑧】
追究の過程	5	○「尊敬する人を紹介しよう」というテーマでスピーチ活動を行う目的や内容を知り、紹介する人を決め、英文を作ることができる。 ・学習の目的と内容を知り、紹介したい自分の尊敬する人を決め、簡単な紹介文が作成できたかを振り返る。 【見通し２】	・キング牧師らの尊敬できることを英文にしたものを参考にすることで、部分的に替えてワークシート②にオリジナル文を作ることができるようにする。 ・アドバイスブックを活用することで、自分の思いを英語に表現できるようにする。	・キング牧師らについての英文をモデル文として参考にし、部分的に替えてオリジナル文を作ることができる。 B:表現したいことが１～２文以上で、相手に伝えている。 A:表現したいことが３文以上で、相手に表現を工夫しながら伝えている。 （観察・ワークシート②）　【ア⑥⑦、イ⑤】
	6	○ペアでのＱ＆Ａ形式の会話を通してスピーチの内容を広げようとしている。 ・Ｑ＆Ａ形式の会話をしたことを英語で表現し、内容が深められたかを振り返る。 【見通し２】	・モデル文を使ってＱ＆Ａ形式の会話を提示することで、基本となる質問とその答え方を身に付けることができるようにする。 ・Ｑ＆Ａの結果をワークシート②にまとめることで内容を膨らませることができるようにする。	・Ｑ＆Ａ形式の会話に意欲的に取り組もうとしている。 B:Ｑ＆Ａ形式の会話によって５～６文に内容を膨らませている。 A:Ｑ＆Ａ形式の会話によって７文以上に内容を膨らませている。 （観察、ワークシート②）【ア④、イ②、ウ②】
	7	○作成した英文を、内容を考えてスピーチの形式に整理し、まとめることができる。 ・英文がスピーチの形式に整理しまとめているかを振り返る。 【見通し２】	・スピーチの形式を提示し、さらにアドバイスブックを活用することで、今まで作った英文をよりスピーチらしくワークシート③に整理できるようにする。	・作成した英文をスピーチの形式に整理しまとめることができる。 B:７～９文にまとめることができる。 A:内容を整理し、１０文以上にまとめることができる。（課題・評価カード②、ワークシート②、③） 【ア⑦⑧、イ⑥】
まとめの過程	8	○表現の工夫をしようとしながらスピーチの音読練習を行う。 ・表現の工夫が身に付いているかを振り返る。	・キーワードとなる語を考え、スピーチ原稿に強勢や抑揚、区切り等の記号を書き入れることにより、表現の工夫をしながら音読練習をすることができるようにする。	・記号やメモをもとに、表現の工夫をしながら音読練習をすることができる。 B:課題を意識して意欲的に音読練習をしようとしている。 A:複数の課題解決を目指し、意欲的に音読練習に取り組んでいる。 （観察）【ア⑤、イ①③】
	9	○意欲的にスピーチを発表しようとしている。 ・表現の工夫をしながらスピーチ発表をしようとしていたかを振り返る。 【見通し３】	・自己課題を提示することで、発表者には課題を意識して発表するように、聞き手には発表者の努力した点がわかるようにする。 ・聞き手が審査を書く際に、相手のよい点や努力した点を評価するようにする。	・表現の工夫をしながら、意欲的に発表しようとしている。 B:課題を意識して意欲的にスピーチ発表しようとしている。 A:複数の課題解決を目指し、表現豊かにスピーチ発表しようとしている。 （観察、課題・評価カード③）【ア①②③】

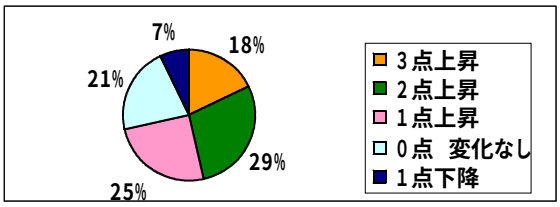
Ⅵ　研究の結果と考察

1　つかむ過程において、ワークシート①を活用しながら、スピーチのモデルから効果的にスピーチを行う表現の工夫を学び、意識して音読練習を行っているかを振り返ることは、自分が解決すべき課題に気付くことに有効であったか

はじめに、課題・評価カード①を使い、今までのスピーチ活動を English（英語らしさ）、Contents（内容）、Attitude（態度）という３観点について、(A)十分にできている、(B)意識はしているが十分でない、(C)意識をしておらず十分ではない、という３段階での振り返りを行った。その後、キング牧師のスピーチ映像を提示し、自分の考えを伝えるときに多くの人々の関心を引く魅力的なスピーチにするための効果的な表現とは何かを考え、各々でワークシート①に記入させた。そして、話すことにおける English（英語らしさ）の表現力を音読練習で身に付けるために、「発音」「リズム」「文の構造（区切り）」の３項目を意識して教科書の音読練習を行った。その後、自分にはどんな力が身に付いていて、どんな力が必要なのかを考え、自己課題を設定するための振り返りを行った。

学級全体の様子としては、課題・評価カード①での音読前の自己評価の結果は、「発音」「リズム」「文の構造（区切り）」のどの項目でも、(A)が少なく(B)が多かった。音読練習前に、生徒たちはワークシート①の教科書の英文に強弱や区切りを表す記号を熱心に書き込んでいた。その記号を基に音読練習を行うと、口の形や強弱、区切りを意識して英文を読むようになった。資料１は、前回行った自己評価と音読練習後に再び行った３項目の自己評価の比較である（資料１）。

資料１　音読練習前後の自己評価点の変化量



その結果、３つの項目で(A)の人数が増加し、逆に(C)の人数が減少した。(A)を３点、(B)を２点、(C)を１点として個別に変化量を比べた場合、前回よりも上昇した生徒の割合は72%であった。０点で変化のなかった生徒は21%、逆に－１点と下降した生徒は７%であった。評価が低くなった理由として、「今までできていると思っていたが、できていないことに気付いたから。」と答えていた。生徒たちは、(B)→(B)と評価が上がらなかったものやもっと表現力を高めたいと思うものを自分で考え、自己課題に選んだ。「発音」を選んだ生徒が39%、「リズム」が25%、「文の構造（区切り）」が36%で、それぞれが自分の課題をつかんだと思われる。

Ａ女は、教科書の音読モデルを聞く際、熱心に強弱や区切りを表す記号をワークシート①に書き入れていた。英語らしい発音はふだんから意識しているので、今回は「全体的にはリズミカルに、大事なところは訴えかけるように話すこと」を目標にしたいと感想で書いている。そこで、大事な語や相手に伝えたい箇所を強く言い、強弱をつけるとリズミカルに表現できるようになると教師が助言した。すると、強弱を表す記号を見ながら、熱心に音読練習に励んでいた。音読練習前後の自己評価を比べてみると、「リズム」(B)→(A)と評価が上昇している。しかし、まだ現状では不十分として「リズム」を自己課題に設定した。

Ｂ男は、音読練習の際、初めのうちは英語らしい発音を心がけて読んでいたが、思うように発音できず、弱音を吐いていた。そこで、英語らしい発音は短時間では身に付きにくく、口の形を意識して読む練習を続けることが大切であると教師が助言した。すると、時折首を傾げながらも、舌を歯で挟(はさ)んだり下唇をかんだりして音読練習に取り組んでいた。その後の音読練習では、強く読む語や区切る場所が自分の予想と合っていたので、以前より意欲的に練習に取り組んでいた。音読練習前後の自己評価を比べてみると、「発音」に関しては(B)→(B)と変わらなかった。そして、自己課題に「発音」を選んだ。音読練習で、英語独特の口の形になるように努力していたが、十分にできなかったため、英語らしい「発音」を身に付け、「相手に聞き取りやすいように発音すること」という目標を感想で書いている。

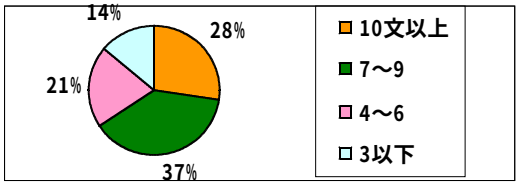
以上のことから、つかむ過程において、スピーチのモデルから効果的にスピーチを行う表現の工夫を学び、それらの工夫を意識して音読練習を行っているかを振り返ることは、自分が解決すべき課題に気付くことに有効だったと考える。

2　追究の過程において、Ｑ＆Ａ形式の会話やアドバイスブックを活用しながら、スピーチ原稿をワークシート②、③に作成する活動の中で、設定した自己課題の表現力が身に付いているかを振り返ることは、互いに学び合いながら課題を追究できるようにすることに有効であったか

まず、生徒たちは、「自分の好きな人・尊敬する人」というテーマに対し、どの人物を紹介するか話題選びを行った。次に、教科書の参考となる文章を基に、スピーチの基礎となる３文をワークシート②に作成した。そして、グループで作成した英文を仲間に紹介し、Ｑ＆Ａ形式の会話を通して相手が聞きたい事柄を盛り込み、内容を膨らませていった。その後、アドバイスブックや辞書を参考にしながら、ワークシート③を使って英文をスピーチ形式にまとめ、教師やALTの確認後、ワークシート②に清書した。この間、Contents（内容）の観点で、課題の追究がどこまで進んでいるかを課題・評価カード②で繰り返し振り返った。

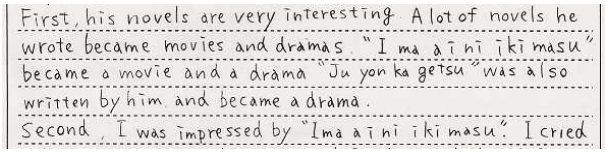
学級全体の様子として、Ｑ＆Ａ形式の会話の段階では、どのグループでも相手の英文を聞き、意欲的に質問をしていた。Ｑ１～Ｑ３までは共通の質問をするようにしたが、それ以外にも、“How old is he?”“When did you like him?”と自分の考えた質問をする場面が見られた。また、スピーチの形式にまとめる段階では、アドバイスブックを参考にしたり、教師や仲間に相談したりする意欲的な姿が多く見られた。生徒が作成した英文数を段階ごとに集計したところ、基礎となる３文から始まった英文数は、Ｑ＆Ａ形式で内容を膨らませた時点で５～６文となった。スピーチ形式に整理した時点でのオリジナルの英文数は、十分満足(A)に達する10文以上の生徒が28%、おおむね満足(B)に達する７～９文を書いた生徒が37%であった（資料２）。

資料２　追究の過程後のオリジナル文の数



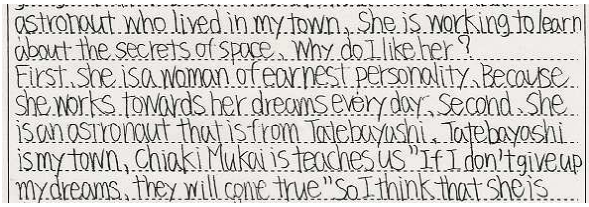
Ａ女は、「作家の市川拓司さん」を尊敬する人に選んだ。基礎となる３文を作る段階では、３文目に何を書けばいいかが思い浮かばず、悩んでいた。次のＱ＆Ａ形式の会話で、仲間から “What novel do you like the best?” と聞かれ、“I like *‘I ma a i ni i ki ma su.’* the best.”と、昨年の市川さんのヒット作を挙げていた。その後、書きたい内容が膨らみ、その作品の紹介を熱心に英語で書き始めた。Contents（内容）の課題を「３年生で習った表現を使って自分の気持ちを表すこと」としていたので、“A lot of novels he wrote became movies and dramas.”（関係代名詞の省略）や、“I was impressed by *‘I ma a i ni i ki ma su.’*”（受身）の英文も見られた（資料３）。スピーチの形式にまとめる段階で、書いた英文が自分の言いたいことと合っているかを数回教師に確認していた。ALTが説明をしながら英文を修正すると、「そうか」とうなずいていた。Ａ女の英文数の変化は、Ｑ＆Ａ形式後の段階で６文、スピーチ形式の段階でのオリジナル文が９文、最終的には14文となった。

資料３　Ａ女のワークシート②の原稿


First, his novels are very interesting. A lot of novels he wrote became movies and dramas. "I ma ai ni iki masu" became a movie and a drama. "Ju yon ka getsu" was also written by him and became a drama.
Second, I was impressed by "Ima ai ni iki masu". I cried

Ｂ男は、慎重に時間をかけて話題を決定したが、「宇宙飛行士の向井千秋さん」を尊敬する人に選ぶと、比較的短時間で基礎となる３文を書き上げた。Ｑ＆Ａ形式の会話では、自信がなさそうに仲間の質問に答えていた。しかし、仲間が “Why do you like her?”と尋ねると、辞書で「まじめ」は何というかを調べてから、“First, she is earnest. Second, she lived in my town.”と２つの理由を答えた。その後、Ｑ＆Ａ形式の会話を生かし、友達と相談しながらワークシート③に下書きする意欲的な姿が見られた。スピーチ形式にまとめる段階で、「自分の思いを相手に分かりやすく伝えるにはどう英語で表現したらいいのか」を課題にした。教師に “She is working to learn about the secrets of space.”と文が自分の思いと合っているかを確認してきた。「ここまでよく書けているよ。結びはＱ＆Ａの３番の文を使ってごらん。」と助言すると、“If I don't give up my dreams, they will come true.”という英文を使って結びの部分を仕上げていた。これらの英文から、自己課題が達成できているかを教師に確認する意欲的な姿と努力が伝わってくる（資料４）。Ｂ男の英文数の変化は、Ｑ＆Ａ形式後の段階で４文、スピーチ形式の段階でのオリジナル文が９文、最終的には14文となった。

資料４　Ｂ男のワークシート②の原稿


astronout who lived in my town. She is working to learn about the secrets of space. Why do I like her?
First, she is a woman of earnest personality. Becouse she works towards her dreams every day. Second, She is an astronout that is from Tatebayashi. Tatebayoshi is my town. Chiaki Mukai is teaches us. "If I don't give up my dreams, they will come true." So I think that she is

以上のことから、追究の過程において、スピーチ原稿を作成する活動の中で、設定した自己課題の表現力が身に付いているかを振り返ることは、互いに学び合いながら課題を追究できるようにすることに有効だったと考える。

３　まとめの過程において、自己課題を提示しながらスピーチ発表を行い、自分や相手の表現力が向上しているかを振り返ることは、達成感を味わい、意欲的に英語で表現しようとする態度の育成に有効であったか

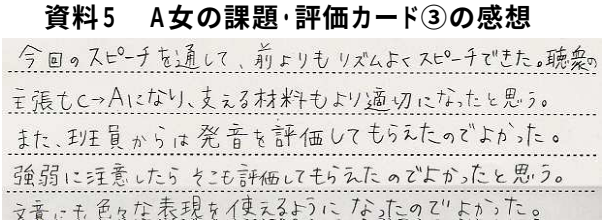
まず、スピーチ発表をグループごとに行った。発表者には、English（英語らしさ）、Contents（内容）、Attitude（態度）という３観点の自己課題を班員に提示することで、今までの課題への努力が伝わるようにスピーチ発表することを呼びかけた。聞き手の班員には、審査の仕方として発表者のよさや努力を評価するように伝えた。発表後、審査した用紙を互いに交換し合った。そして、班員が書いた審査用紙を自分の課題・評価カード③に貼り、自分の努力と班員の評価を基に、最終的な自己評価と感想を書いた。

全体の様子として、発表の場面では、強弱をつけてリズミカルに発表する者やアイコンタクトを試みて発表する者など、どの発表も表現力が豊かになり、聞き手も発表者の工夫を楽しんでいた。審査用紙に書かれた生徒の言葉からも、相手のスピーチの内容を理解し、楽しむことができたことが分かる。審査用紙を読んだ後の感想に、「発音に気を付けたら、友達の審査に発音がよかったと書いてあってうれしかった。」と書かれているように、自分の努力を仲間が評価してくれたことに

喜びを感じた生徒が多かったようである。また、「一つ一つの課題を解決していくことで、少しずつ自信がつき、英語で書くことが楽しいと思えるようになった。」と、自分の成長を実感し、英語で表現する喜びを味わった生徒もいた。スピーチ後の自己評価では、全体的に(A)の数が伸び、達成感を味わっていた。

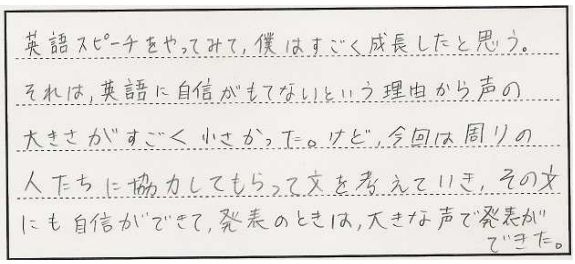
A女は、自分の課題として、English では「リズムよく」を、Contents では「本論と結びに３年生で習った表現を使うこと」を、Attitude では「声の大きさや張りに気をつけること」を挙げて発表を行った。強く読む語を意識すればリズムよくなることを再度助言すると、元気よくうなずき、発表を始めた。強弱を意識し、感情を込めながらリズムよく発表していた。仲間の審査には「発音がよく、テンポもよかった。」「３年生で習ったことを上手に使っていた。」という賞賛のコメントが多かった。A女の感想には、「前よりもリズムよくスピーチできた。」「強弱に注意したら、そこも評価してもらえたのでよかった。」と書いてあり、自分の成長を実感し、達成感を味わっていることがわかる（資料５）。

資料５　A女の課題･評価カード③の感想


今回のスピーチを通して、前よりもリズムよくスピーチできた。聴衆の
主張もC→Aになり、支える材料もより適切になったと思う。
また、班員からは発音を評価してもらえたのでよかった。
強弱に注意したら そこも評価してもらえたのでよかったと思う。
文章にも色々な表現を使えるようになったのでよかった。

B男は、English では「英語らしい発音」を、Contents では「みんなが知っている簡単な単語を使うこと」を、Attitude では「十分な主張ができること」を自己課題に挙げて発表を行った。堂々と発表できるように、原稿を持つ手を伸ばし、位置をやや下向きにするよう助言した。やや声が小さくなる部分もあったが、姿勢も以前より堂々と、そして、英語らしく発音するよう心がけていた。仲間の審査に「発音がよかった。」「だいたいの内容を理解することができた。」という、自己課題が達成していることを表すコメントが書いてあった。また、「今回は周りの人たちに協力してもらって文を考えていき、その文にも自信ができて、発表のときは大きな声で発表ができた。」という言葉からは、仲間の協力による学び合いを通して、自分の課題を解決し、自信をもってスピーチができたという達成感が味わえたことを感じ取ることができる（資料６）。

資料６　B男の課題･評価カード③の感想


英語スピーチをやってみて，僕はすごく成長したと思う。
それは，英語に自信がもてないという理由から声の
大きさがすごく小さかった。けど，今回は周りの
人たちに協力してもらって文を考えていき，その文
にも自信ができて，発表のときは，大きな声で発表が
できた。

以上のことから、まとめの過程において、自己課題を提示しながらスピーチ発表を行い、自分と相手の表現力が向上しているかを振り返ることは、達成感を味わい、意欲的に英語で表現しようとする態度の育成に有効だったと考える。

Ⅶ　研究のまとめと今後の課題

○　スピーチ活動に振り返りを取り入れることで、生徒は今までにうまくいかなかったことや意識していなかったことに気付き、自分の能力に応じた課題を追究することができた。その結果、書くことにおいて、以前よりも多くの英文を書くことができ、スピーチの形式にまとめることで達成感を味わう生徒が多かった。また、課題を意識して発表することで、表現豊かに発表しようとする意欲的な姿が見られた。さらに、生徒の審査による振り返りにより、努力を認められた成就感や英語で表現できる喜びを味わうことができた。今後も生徒が自信をもって意欲的に自分の思いを英語で表現することが期待できる。

○　生徒が作成した英文をスピーチの形式にまとめる際、ヒントとなる英文や日本語の指示を載せたワークシートを使用した。しかし、文章の内容や流れによっては、それらのヒントや指示が生徒のオリジナルの文と合わせにくい場合もあった。したがって、生徒の創意を生かせるように、ワークシートをさらに工夫し、改善する必要があると考える。

＜参考文献＞

・津田　幸男　著　『パターン活用　楽しい英語のスピーチ』　　創元社(1994)
・寺島　隆吉　著　『キングで学ぶ英語のリズム』　あすなろ社(1997)